堰を切る、そして、水は躍る

“水” と “まち” ———

両者は安全を保証する堤防という壁で隔たれている

安全であるという過信が防災意識を低下させているのではないだろうか

“水” の恩恵を享受しつつ、災害に対して柔軟に対応できるインフラとして本計画を提案する

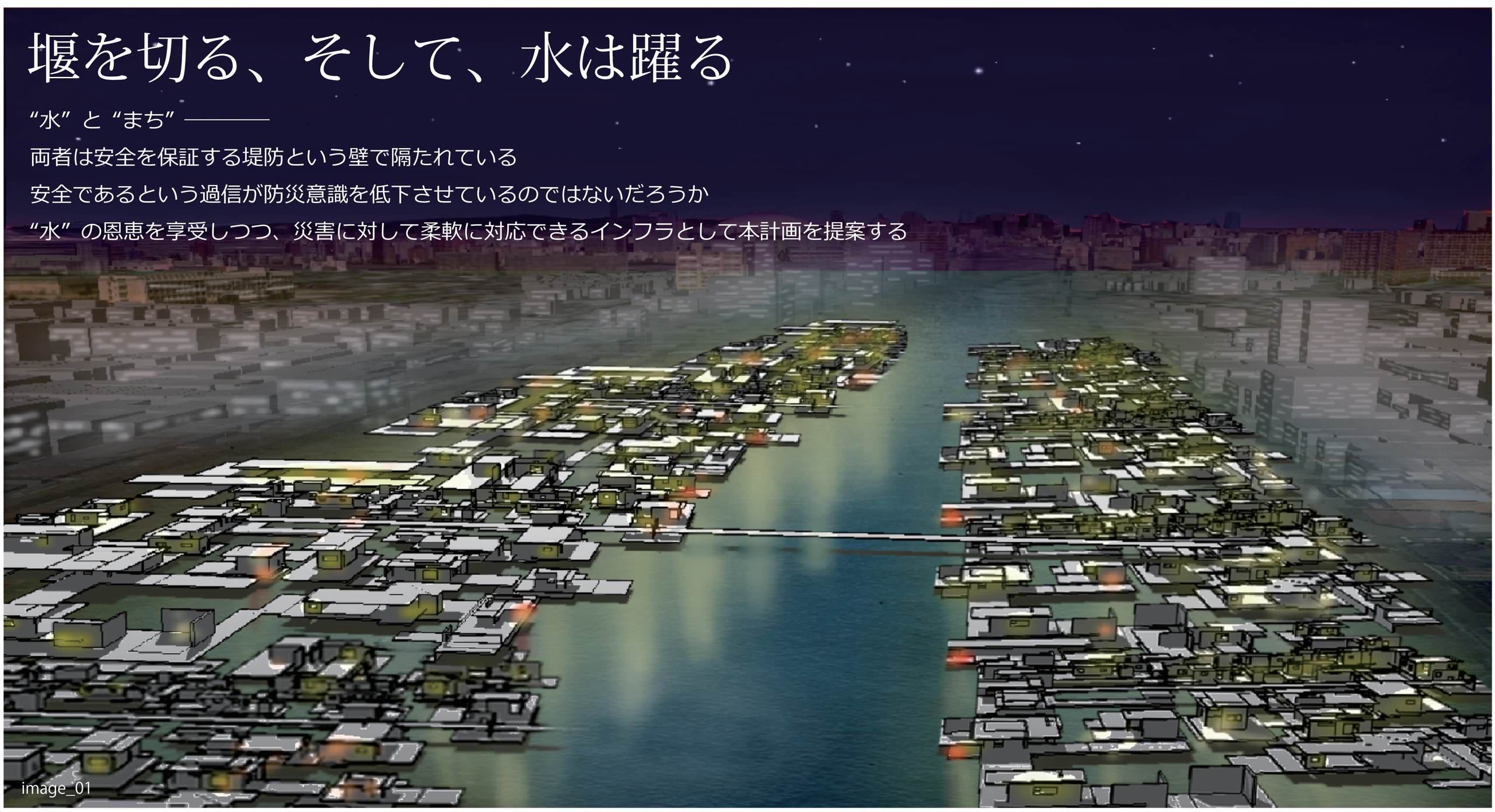
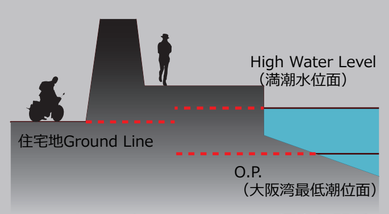


image_01

Site/Analysis

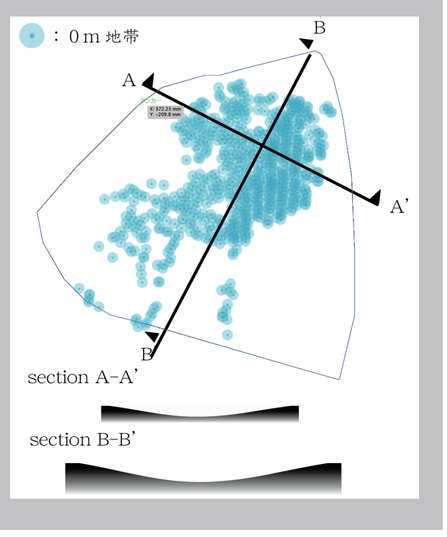
敷地は大阪市南西に位置する大正区三軒屋町。大阪湾に程近く、尻無川と木津川の二つの川に挟まれている。また、現在大阪では、『水都大阪』復活に向けた取り組みが為されている。

過去に起きた地盤沈下によって、大正区の GL は外縁部を流れる川の水位よりも低く、椀状の地形をした海抜０m 地帯となっている。南北に伸びる高さ５m の堤防が大正区河岸部を囲い、人は物理的にも視覚的にも水と分断されている。そのため人は水と疎遠になり、海抜０m 地帯という危機的状況を忘れるほど防災意識が低下している。



Ground Line と Water Level の標準的関係

国土地理院標高データベースの分析から、０m 地帯を決定した。またここから、椀状の地形の実証もとれた。



Back Ground

かつての密集住宅地は人口が減少し、高齢化が進行している。しかし、三軒家町は地価の安さから、若者が多く住み始め、集合集宅の需要が高まってきている。それぞれが一人暮らしのため、世帯間の交流が軽薄である。また、かつて家族で住んでいた間取りの家に、以前より平均１人少ない人数の世帯が住んでいる状況である。よって、家屋のゆとりが大きく、使われていないスペースが多分に存在する。

一世帯の床面積が広い

世帯間の交流が疎遠

↓

・不要なスペースの存在

・防災にもっとも必要な

共助が行われにくい

Issue

災害の想定が容易でない・親水空間が欠如している・防災施設としての無機質で生活感がない。このような今日の防災インフラを刷新し、関係を隔てた水と人の生活の再編を行い、防災意識を啓蒙させるような防災インフラである必要ではないだろうか。

Concept/Suggestion

想定する災害は、高潮・津波による浸水。

関係を隔てた水と人の生活の再編及び、人の防災意識の啓蒙を図るには、水と常日頃から関わる事が重要であると考え、都市の中に水に強い浸水空間を提案する。

年に数回起こる高潮による最大満潮時に周囲の人々と助け合いながら、非浸水域へと避難する。避難が完了すると、まちが浸水した壮大な風景を背景に、浸水時用のまちの機能が機能し始め、潮位が作用する新たなまちの景観となる。

スラブ挿入

海抜０m 地帯にグラウンドレベルから浮いたスラブを挿入する事で非浸水空間を作り出す。それぞれのスラブは各高さによって、浸水したり、しなかったりとその日の潮位の高さによって変化する。また、浸水時にはグラウンドレベルに代わって、各建物へのアクセスを可能とする新たな経路へとなる。

まち割り・街区再編

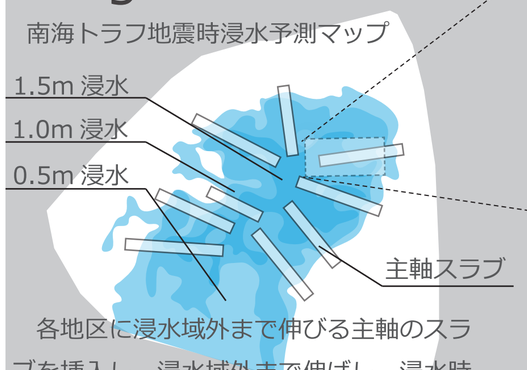
スラブによって繋がった建物同士を新たなまち割り・街区として再定義し、お互いを助け合う、共助を行うユニットとする。

共同生活

生活という概念を一つの住戸単位で考えるのではなく、街区単位で考える。１人の生活は複数の住戸に属することで成立する。そうして地域間の交流が増え、災害時の共助の礎となり、まちの暖かみとなる。

Diagram

南海トラフ地震時浸水予測マップ



各地区に浸水域外まで伸びる主軸のスラブを挿入し、浸水域外まで伸ばし、浸水時に各建物にアクセスできるようにする。

各建物から主軸スラブへとアクセスできるように、さらにスラブを挿入する。隣人との新たな共用スペースが生まれ、共助の礎となる。小さいスラブの近隣付き合いから街区、まちへと人が繋がっていく。スラブは高くなるほどに、大きくなり、許容する人数を増やす。

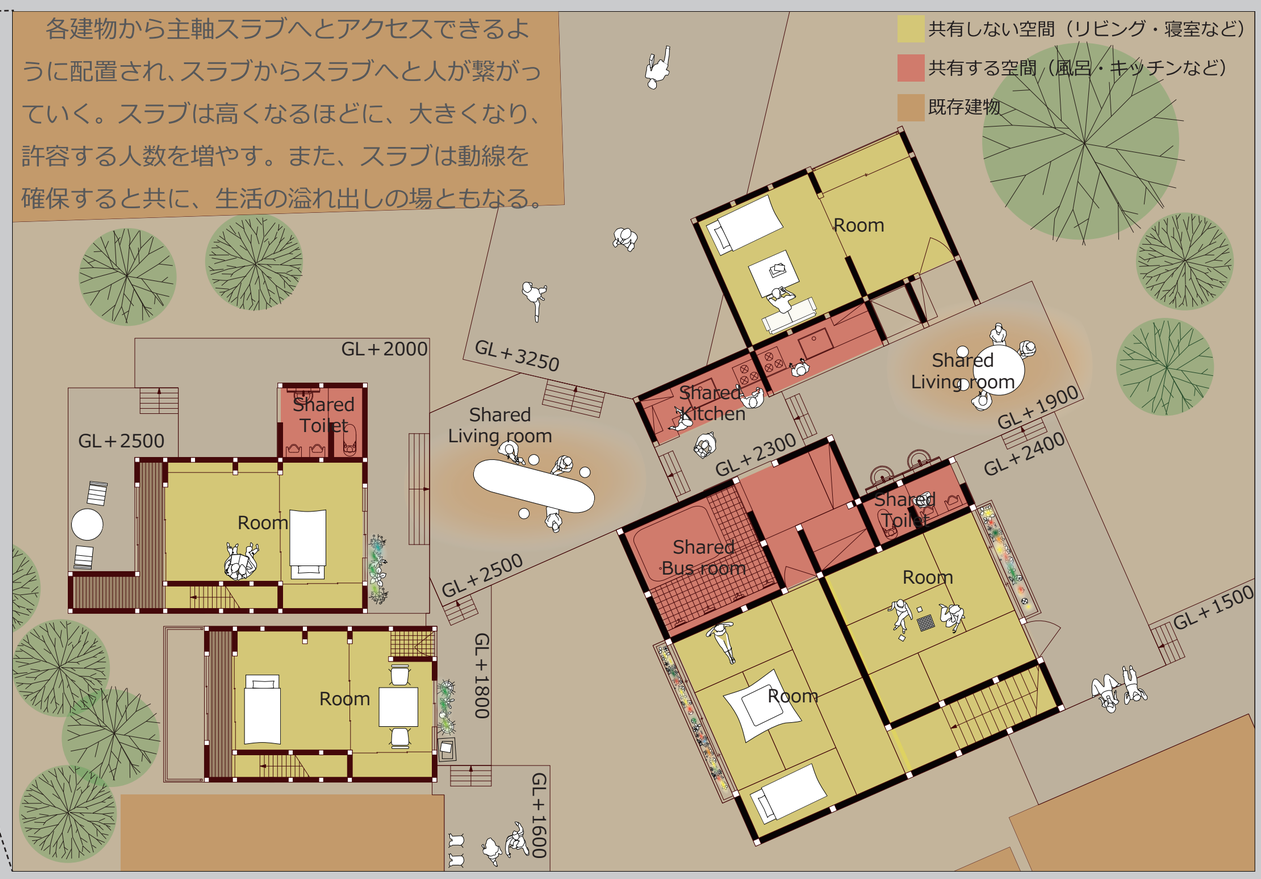
Details

1.5m 浸水域は新規の建物、浸水域に近づくに連れて、既存の建物が増えるように計画する。既存の建物は木造が多く、浸水しても構造として保つように新たな構造体で支える。実際に浸水した時のまちの状態をより身近に感じてもらう事、現在のまちの雰囲気を大きく変えない事、現在のまちでも今回提案するスラブを挿入する事で災害に立ち向う明るい希望を込めて既存部分を残し、テクスチャーとして利用する。

image_02

Site Plan

各建物から主軸スラブへとアクセスできるように配置され、スラブからスラブへと人が繋がっていく。スラブは高くなるほどに、大きくなり、許容する人数を増やす。また、スラブは動線を確保すると共に、生活の溢れ出しの場ともなる。



2F Plan 1/100

1 5 10m